

#S1 ジギー篇 -T.C.4767-

かつて、俺は――
連邦警察隊特殊部隊隊長を勤めていた。
カウンターテロや要人護衛を主任務とした、血なまぐさい日々。
それは、死後も変わることはなかった。
献体サイボーグとして蘇生された俺は、
星団連邦政府から与えられる様々な任務に従事させられている。
いつか生前の記憶を失い、この記憶や感情までもが、
機械のパーツとなる日を夢見て――

#S1 ジギー篇 -T.C.4767-

フィフス・エルサレム

ジグラット・エイト：ジグラット・エイト、出頭いたしました。
接触小委員：ジグラット・インダストリー製サイボーグカー――T.C.4667 年死亡後、本人の遺志により献体。
ジグラット・エイト：その通りです。
接触小委員：今回の任務について、なにか聞いているかね。
ジグラット・エイト：いえ。
接触小委員：（情報収集能力に問題があるわけでは――関心を持つ必要がないというわけか）
先頃、とある武装組織に復活の兆しがあるという情報が入った。十四年前のあの事件を引き起こした組織だ。
ジグラット・エイト：U-TIC 機関――
接触小委員：うむ、我々が独自のルートで入手した情報から、その U-TIC 機関が潜伏している場所が判明した。

小惑星プレロマー——旧世紀から続く古代宗教の礼拝堂としてかつて移民船団が使用していたものだ。
もっとも、彼らにも放棄されてから数世紀、その間はずっと無人だった。

ジグラット・エイト：私にそこへ潜入し、情報を収集しろ——と。

接触小委員：その手の仕事は、諜報局に任せておけばいい。

——簡単に言うとだ、ある者を救出し、速やかに然るべき場所へと送致してもらいたい。

いや、正確に言えば者ではなくモノだが——

ジグラット・エイト：簡潔に願えますか。

???：——これが、そのモノよ。

ジグラット・エイト：子供——民間人ですか？ いや、金色の瞳——レアリエンか。

???：ええ、そうよ。百式観測用レアリエン——ご存じ？

ジグラット・エイト：百式——対グノーシス用として特別に製造されたという、観測用レアリエン。

噂に聞いた事がありますが、幼体偽装だとは思いませんでした。

???：（幼体偽装——）

接触小委員：実物を見るのは初めてかね？

ジグラット・エイト：ええ、しかし——すでにヴェクター社において量産体勢に入っているはずでは。

接触小委員：これはプロトタイプだ。すべての百式観測器の雛形となる、原型なのだ。

ジグラット・エイト：なるほど——つまり、すべての事象よりもこの少女の確保を優先しろとおっしゃるわけですね。

接触小委員：察しがよくて助かる。

で、任務は受けてもらえるのか。

ジグラット・エイト：献体サイボーグに人権はない。拒否する権利はありません。

必要な武器と物資については、状況を分析したのちに——

接触小委員：よかろう、なんなりと申し出てくれ。

ジグラット・エイト：——報酬——というのはなんですが、ひとつ希望を申し上げてもよろしいでしょうか。

接触小委員：言ってみたまえ。

ジグラット・エイト：帰還後、私の生体脳に残存する生前の記憶断片[ノイズ]を除去していただきたい。

接触小委員：かまわないが、君ほどの旧式ともなると、完全な除去は難しいかもしれん。

ジグラット・エイト：人工部品に換装していただいてけっこうです。

接触小委員：奇妙な要望だな。レアリエンが人権を主張する今日び、機械になりたがる人間とはね。

——わかった、手配しよう。

ジグラット・エイト：ありがとうございます。

接触小委員：くわしいことは後ほど、彼女——ユリ・ミズラヒ博士に。

退出してよろしい。

ジグラット・エイト：了解しました。

ユリ・ミズラヒ：なるほどねー彼の死因は自殺だそうだけど、
いまだ自分を消滅させたい願望は存在するというわけね。

接触小委員：そんな男に百式プロトタイプを委ねてもよいのか？ 自滅傾向が現れたらどうする。

ユリ・ミズラヒ：御心配なく、彼には自傷行為と任務放棄を禁じるセイフティが備わっています。
彼は意に反して生き返らせられた。残りの生体脳を人工部品に換装すれば、彼は完全に機械となる。
その時初めて、彼は合法的に”死ぬる”のねー

小惑星プレロマ

???：――気分はどうだね、このような狭い檻のなかにいる虜囚に問うのも、無粋というものかもしれぬが。
――――

また、食事に手をつけていないのか。レアリエンにも補給は必要であろうに。

百式プロトタイプ：――――

???：返事もできないほど、無作法にできているのか。――――百式プロトタイプ。

百式プロトタイプ：――その名前、嫌いです。

???：なるほど、失礼した。で、なんと呼ばれたいのだ？ 百式プロトタイプ嬢。

百式プロトタイプ：正体のよく分からない人に名前を呼ばれたくありません。私をどこへ連れていくつもりですか。

???：それは、君の知るところではないな。

百式プロトタイプ：私はどうなるのですか？

???：我々の役に立ってもらう。機械は使ってこそその命、その後の運命は神のみぞ知る――
といったところか。もっとも、君らに神が存在すればの話だが――――

百式プロトタイプ：私にはグノーシスを見つけることしかできません。だから、お役には立てません。

???：そうかもしれん。だが、我々はお前の”頭のなかにいる男”に用があるのだよー！

百式プロトタイプ：――――！

???：なんにせよ、生かしてもらえる間は生きておくことだ。じき”奴”が到着する。

百式プロトタイプ：ママー――帰りたい――――

フィフス・エルサレム 

ジグラット・エイト：――なるほど、あのレアリエンは U-TIC 機関創設者が遺した膨大な研究データが記録されている――

ユリ・ミズラヒ：そう、人類の存亡に関わるほどのね。

ジグラット・エイト：創設者との関係は？

ユリ・ミズラヒ：U-TIC 機関の創設者はあの子、百式観測器の提唱者でもあるの。

ヨアキム・ミズラヒ――科学に耽溺して、人の道を外れた狂人よ。

ジグラット・エイト：（ミズラヒ――）

ユリ・ミズラヒ：なにか言いたそうね――そう、察しの通り彼は私の”元”夫よ。

虐殺者と結婚した女の人生を知りたい？

ジグラット・エイト：いいえ。

ユリ・ミズラヒ：とにかく、連中もそのデータの確保に躍起になっているのはたしかなの。時間もさほど残されてないでしょうね。

ジグラット・エイト：ひとつ、確認したいことがあります。

ユリ・ミズラヒ：――なにかしら。

ジグラット・エイト：確保後の送致先についてですが、あのレアリエンは、戸籍上は貴方のご息女となっている。

何故、ここ――連邦主星ではなく、ミルチア太陽系圏なのですか？

ユリ・ミズラヒ：現在、ある計画がミルチア～ミクタム宙域を中心に進んでいます。

人類にとって大切な――

いまはそのため――としか言えないわ。それに――――

その方が私も、あの子に会わなくて済むしね。

――この答えではご不満？

ジグラット・エイト：いえ、了解しました。明 0600 時にここを発ちます。

ユリ・ミズラヒ：――お願いするわ。あれが、あなたを運んでくださる貨客船よ。

ジグラット・エイト：ローエン格林級貨客船、船番号 MFHE-59824751――

船主は――特殊財団クーカイ・ファウンデーション。

ユリ・ミズラヒ：故あって、今回の任務にはその財団が全面的なバックアップを提供してくれています。

任務遂行中にトラブルが発生した場合、あてにしていよう。では、私はこれで――

ジグラット・エイト：ユリ・ミズラヒか――奇妙な女だ。

エルザ

マシューズ：よう、あんたがお客さんかい？

ジグラット・エイト：客より荷の方が安くつくというなら、俺は貨物室でもかまわない。

マシューズ：そうつれないこと言いなさんな、どうせ政府持ちなんだ。

豪華キャビンでくつろいで、俺たちにも稼がせてくれよ。――俺は船長のマシューズだ。

ジグラット・エイト：―――ジグラット・エイト。

マシューズ：ま、小さい船だが、大船に乗ったつもりでいてくれ。

200時間も寝ててくれりゃ、もう目的地だ。

ジグラット・エイト：では、ゆっくりさせてもらおう。船長たちの酒代のためにも。

マシューズ：話がわかるじゃねえか。気に入ったぜ、旦那。

小惑星プレロマ

百式プロトタイプ：（―――――

ここにつれてこられてから、もう 417 時間―――

いったい、いつまでこんな日々が続くの――？）

U-TIC 機関班長：おかしい――B 区からの定時連絡がない。

――少し見てくる、お前らはこの扉の前から離れるな。

U-TIC 機関員：はっ。

U-TIC 機関員：了解であります。

百式プロトタイプ：――なにかあったんですか？

U-TIC 機関員：うるさい、いいから奥に座っているろ。

U-TIC 機関員：おい、相手は子――ぐわっ！

U-TIC 機関員：ど、どうした！ なにが――ぐうっ！

百式プロトタイプ：え――な、なにが？

???：いま、光学迷彩を解除する。あわてず、静かにしていてくれ。

百式プロトタイプ：どなた――ですか？

ジグラット・エイト：接触小委員会の依頼で、救助に来た。

百式プロトタイプ：接触小委員会――ママが！

ジグラット・エイト：離れているろ。いまから扉をこじ開ける。

百式プロトタイプ：あ、いけません。警報が設置されています。

私の手が届けば、解除できるのですけど――

ジグラット・エイト：さすがは百式だな。心配はいらない。こちらも装備は用意してある。

これより、セキュリティを電磁的に破壊する。君への被害は考慮する必要があるか？

百式プロトタイプ：シールドを展開すれば、大丈夫です。
―――どうぞ、やってください。

ジグラット・エイト：一応確認する、百式観測器プロトタイプ――間違いないか？
百式プロトタイプ：その名前――嫌いです。
ジグラット・エイト：別の名があるのか？――気づかれたか。話は後だ、脱出するぞ。
百式プロトタイプ：モモ――パパはモモって呼びます。――いえ、呼んでました。
ジグラット・エイト：そうか――行くぞ、モモ。
モモ：はい！

-

U-TIC 機関員：マーグリス司令、百式プロトタイプが行方不明との報告です！
マーグリス：そうか。大方、政府の犬だろう。
脱出するなら、Dブロックだな。ブロック全域を封鎖しろ、前後から挟撃するのだ。
U-TIC 機関員：了解しました！

-

ジグラット・エイト：まずいな、包囲された。ここを突破できれば、脱出できるのだが――
モモ：あの――あなたは軍用の強化レアリエン？
ジグラット・エイト：元・人間だ。
モモ：”もと、人間”？
ジグラット・エイト：サイボーグ――前世紀の遺物だ。軽い気持ちでドナー登録をしたら、死後に再生された。
モモ：悪名高い、ライフリサイクル法ですね。
ジグラット・エイト：ああ、現在の原種保護法はその事後処理も兼ねて制定された。
モモ：あの――お名前、まだ聞いてません。
ジグラット・エイト：――ジグラット・エイトだ。
モモ：ジグラット――エイト？ 本物の人間なのに、それじゃ機械の型番みたいです。
そうだ、ジギーって呼んでもいいですか？ ジグラットを縮めて――
ジ・キ・ィ。
ジグラット・エイト：―――！

ホアキン：ありがとう、パパ！
ジャン：いや――できれば本物にしたかったんだが――その――手が出なくてな。
ホアキン：そんなことないよ、すっごくかわいいよ！

ねえ、この子——名前は決まってるの？

ジャン：ネクス6、だ。

ホアキン：それ、この子の型番でしょ。それじゃホントのロボットみたいだよ。

ジャン：そ、そうか——

ホアキン：うーん——そうだ、ネックス！

ネクス6を縮めてネックス！ どう、パパ！

ジャン：あ、ああ——いい名前だな。

ホアキン：ホント！ よし、ネックス！ 行くよ！

おいで！ こっちだよ——あはははは！

ジグラット・エイト：————

モモ：あの——勝手なことやって——すみません。

ジグラット・エイト：いや——好きにしてくれていい。

モモ：じゃあ、ジギーで決まりですね！ これで大分、人間らしいです。

あ、ちょっと待ってください——

——！ なにかが接近してきます。数は3機、A.G.W.S.です！

ジギー：A.G.W.S.だと——なるほど、単なる武装組織の復活というわけではなさそうだ。

モモ：どうするんですか？

ジギー：さあな、ここにじっとしているわけにもいかんが。

モモ：——大勢の兵士がこちらに近づいてきます。

このままだと、8分後にはここは100人以上の兵力で封鎖されてしまいます。

ジギー：さすが、索敵用レアリエンだな。

モモ：すみません、つまらない話をしてしまっていて——

ジギー：つまらなくはないさ。良い名前をつけてもらった。

だが——

正面突破は無理だな。サイボーグでも、A.G.W.S.3機に手は出せん。ハチの巣になる。

モモ：A.G.W.S.のセンサーが使えないとしたらどうですか？

ジギー：ああ、それならばなんとかなる。だが、どうするのだ？

モモ：ある程度、モモが無力化できます。

ジギー：そんなことが——

モモ：ヒルベルトエフェクトです。

波長をインバートして、その相互干渉でA.G.W.S.の索敵装置をシステムダウンさせるんです。

それで、外部センサーの大半は無力化できると思います。

ジギー：ヒルベルトエフェクト——

モモ：対グノーシス固着システムのことです。本来は、艦船に搭載されるアンブリファイアーを介して、

広域使用されるんですがーこの広さくらいなら、モモ一人でも展開できます。

ジギー：なるほどな。わかった、やってくれ。

モモ：はい、ではーいきます！

ジギー：はあああっ！

モモ：―――！

ジギー：モモ！

モモ：はあ、はあ―――

ジギー：どうしたーそうか！相互干渉といったな。

さっきのダメージ、お前にも残っているのか。

モモ：平気ですーそれよりジギー、近づいてくる人がー

???：なるほど、そのレアリエンのおかげでここまで来られたというわけか。

それにしても不甲斐ない。たかがサイボーグ一体、制圧できんとはな。

モモ：ジギー、この人―――

ジギー：ああ、解っている。油断するつもりはない。

マーグリズ：ー久しぶりにいい運動ができそうだ。この刀も喜んでいる。

行くぞ、サイボーグッ！

ジギー：ぐうっ、この男ー並みの使い手ではないー！

マーグリズ：どうした、そこまでか！

ジギー：（モモ、聞こえるかー）

モモ：（通信機でーは、はい、聞こえます！）

ジギー：（この先のブロックから、停泊中の貨客船に乗り込める。

ハッキングで、敵の目をごまかしてられる間は待ってくれるそうだからー

もう逃げ出しているかもしれないが、運がよければ、乗り込めるだろう）

モモ：（ジギーはどうするんですか！）

ジギー：（この男、食い止めるだけで精一杯だ。君だけでも脱出できれば、俺の任務は完遂する）

モモ：（そんな―――）

ジギー：（いいんだ、行ってくれ）

マーグリズ：どうした、隙だらけだぞっ！

ジギー：ぐおおっ！

マーグリズ：とどめええっ！

モモ：ジギー！

マーグリズ：むー

重力が消失したと！

ジギー：掴まれ、モモ！俺の脚部なら、重力靴と同じ機能を持っている。

モモ：はい！

マッシューズ：旦那、いまですぜ！ はやくこっちへ！

ハマー：携帯端末じゃ、ここのホストに侵入してられるのは、あと5分が限界っす！

マーグリス：おのれ、ネズミが！

ジギー：ふん！

マーグリス：（くっ、無重力下では力が発揮できんかーーーー）

ジギー：すまん、ここは脱出させてもらう。

マーグリス：ぐっ、ぬかったか！

奸智と呼ぶにも値せぬ、小細工に長けた犬が！

モモ：ジギー、はやく！

ハマー：こっちの障壁、下ろすっすよ！

ジギー：わかったー！

マッシューズ：すぐ下の気密室の外に、エルザを待たせてあるんでね。急いで脱出しましょうや。

ジギー：なんと無茶なことをー

マッシューズ：船が見つかったんでね。これからトンズラするところさ。その前に、ちょっと寄り道ってね。

ま、旦那がいけすかない野郎だったらこんな酔狂、思いつかなかったでしょうけどね。

ハマー：船長～、とか言ってほんとに成功報酬目当てでしょ。

マッシューズ：るせえ！男にはな、本音と建て前ってやつがあるんだ！

ハマー：ーーーーそれ、なんかカッコ悪いっすよ。

モモ：あ、あのーーーー

助けに来ていただいてーありがとうございます！

マッシューズ：お、おい旦那ーこの嬢ちゃんが？

ジギー：ああ、保護対象の百式プロトタイプ、ーーーーモモ、だ。

マッシューズ：（こんな嬢ちゃん一人に、武装結社だの、政府のサイボーグだのがねえ）

ま、礼には及ばねえよ。俺たちや、運び屋。これが仕事だ。

それにまだ、帰り道が残ってるしな。

ハマー：そうっすね！

マッシューズ：聞こえるか、トニー！これからエアロックに入る。前部ハッチ開放、急げ！

トニー『アイサー！』

エルザ 

トニー： よっしゃ、前部スラスター、最大出力で点火ああ！

ハマー： 小惑星との距離、800！

トニー： オッケイッ、ロジカルドライブ起動っ！

このまま、ハイパースペースへ突っ込むぜえええっ！

惑星プレロマ

U-TIC 機関員： ダメです、対象はすでにゲートイン！ ロストしました！

マーグリス： ふんー連邦にしては、気の利いた連中を投入してきたものだ。

まあいい、奪回の方法なら、いくらでもあるー

フィフス・エルサレム

接触小委員： 百式の回収の件ですが、先ほど、帰還ルートに乗ったとの情報が入りました。

接触小委員： ほう、意外に早かったな。

後は第二ミルチアまでの移送が完了すれば、一安心といったところか。

接触小委員： 面倒なものですね。こちらで解析できれば手間いらずなものをー

接触小委員： あのレアリエンに施されたプロテクトの解除は、

かつてはヴェクターの転移ゲート制御施設だった第二ミルチアの U.M.N.管理センターでしかできないからな。

接触小委員： そう、それに旧ミルチア宙域は十四年前の一件以来、数十光年にわたって、閉ざされたままだ。

通常航行で行き来することを考えれば、楽なものさ。

接触小委員： ヨアキム・ミズラヒー余計なことをしてくれたものだ。ーおっと、これは失礼。

ユリ・ミズラヒ： 気になさらないで下さい、事実ですから。

接触小委員： ところで Y 資料ーあると思うかね、あのレアリエンの中に。

ユリ・ミズラヒ： 閉塞された宙域の U.M.N.転移ゲートの解除コードが記録されているところまでは、確証が持てます。

ですが、それ以上については未知数ですね。開けてみないことにはー

接触小委員： もしなければ、プロジェクトゾハルの遅延は免れんな。議会にどう説明をしたものかー

ユリ・ミズラヒ： 仮に紛失していたとしても、ひとつだけ手がかりがあります。

接触小委員：ほう、それは――

ユリ・ミズラヒ：お手元の資料をご覧ください。それはかつて、ミズラヒの助手をしていた少年のものです。
（助手―――そうね、彼はヨアキムの助手だった。決して―――）

接触小委員：この少年が、Y 資料について、なにか知っているというのかね。

ユリ・ミズラヒ：ええ、当時の状況からの推測ですが。

接触小委員：現在、この少年はどこでなにをしているのですか？

ユリ・ミズラヒ：氏名、経歴ともにロスト。14 歳という年齢とボロメオ大の学生であったということだけはたしかです。
ミズラヒからの伝聞ですが――

接触小委員：弱冠 14 歳でボロメオとは、優秀だな。
生きているならば、28 歳か――

この資料に添付されている論文、これはヒルベルトエフェクトの副次効果についてのものですね。

接触小委員：ヒルベルト―ヴェクターに潜り込んでいる可能性はあるのですか？

ユリ・ミズラヒ：U-TIC 機関創設以前、ミズラヒ脳物理学研究所時代にパトロンだったのはヴェクターです。
ありえない話ではないですね。確証は持てませんが――

接触小委員：ミズラヒ博士、この件については引き続き調査を頼みます。

ユリ・ミズラヒ：わかりました。

接触小委員：とにかく、旧ミルチア宙域を閉鎖されている封印を解くことが急務だ。
あそこに眠るオリジナルゾハルを回収しないことには、すべてが始まらないからな。
ユリ・ミズラヒ：（そのために、モモを解析する――あの人か――ヨアキムがそのことを知ったら――
なんと言うかしら―――）

エルザ

モモ：――私たち、助かったんですか、ジギー。

ジギー：わからん。敵も追っ手を繰り出してはくるだろう。
後は我々の運と、この船のクルーの技量次第か。

モモ：でも、フィフス・エルサレムへ近づけば、U-TIC 機関も手が出しにくいですよ。

ジギー：モモ、小委員会本部へは戻らない。

モモ：え――どうして――？

ジギー：君の行き先は、第二ミルチア自治政府だと聞いている。すまない、そういう命令だ。

モモ：――――

わかりましたー

（ママーきっとまた、会えますよねー）